

# にごりえ

## 映画文学人生論

原作：樋口一葉 (1895) 「文芸倶楽部」  
参考：現代語訳『にごりえ』伊藤比呂美  
監督：今井正 (1953) 脚色：水木洋子 井出俊郎  
出演：お力 淡島千景 撮影：中尾駿一郎  
          久我美子 (『大つごもり』) 音楽：団伊久磨  
          阿関 丹阿弥谷津子 (『十三夜』)

私だとして人間でござんすほどに少しは

心にしみる事もあります

樋口一葉は五千円札に肖像が採用されたこともある女流作家。肺結核のため二十四歳の若さで亡くなった生涯は佳人薄命というしかない。

代表作の『にごりえ』は当然、多くの日本人に愛読されているはず——ではあるが、私の知人はほとんど読んでいないし、私も未読。このままでは不甲斐ない、申し訳ないという気持があり、遅まきながら挑戦することにした。

まず今井正監督の映画（『十三夜』『大つごもり』『にごりえ』という三話のオムニバス形式）を観て大筋をつかんでから、原作を読んだ。それだけの予備知識があっても解読に苦労したが、すこしは理解できる箇所もある。

たとえば、主人公のお力が馴染み客の結城朝之助にいうセリフ、「私だって人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります」。

これはいわゆる郭（くるわ）ことばだ。遠国から遊里に売られてきた女は地方の訛りをなくし、洗練されたことばを使うよう教育されたという。現在はずたれてしまっているが、味わい深いひびきがする。「あたしだって人間ですもの。すこしは心にしみる必要があります」という現代語ではさほどの情緒は覚えない。

朝之助はお力をひいきにして通ってくれているし、お力も朝之助を慕っている。ところが、お力



## にごりえ

映画文学人生論

は突然、貧しい源七と心中してしまう。なぜそうなるのかよくわからない。

一葉の文体は、「雅俗折衷文体」といわれている。幸田露伴や尾崎紅葉の文体と似ているが、『五重塔』や『金色夜叉』と比較しても、『にごりえ』のほうが読みにくい。

幸い、伊藤比呂美による現代語訳が見つかったので、参考にさせてもらった。それによれば、蒲団屋の源七は羽振りのよい客だったが、お力に入れあげて通いつめたあげく、すっかり落ちぶれてしまった。妻子とも離別し、生きる意欲を失っている。一方のお力は売れっ子だが、貧乏人の暮らしは経験しつくしており、先行きには何の希望も抱いていない。つまり、心中の理由は人生への絶望と推察できる。

それにしても、わずか百三十年前の女流作家の文章を理解するのにこれほど苦勞するのは、私の頭が悪いせいだが、日本語にも問題がある。黒船来航の後遺症でおかしくなった日本語はたして文明国の言語といえるだろうか。

などと、都合の悪いことは何もか黒船のせいにするのは卑怯かもしれない。永井荷風の日記によれば、「今の世の婦人にして、もし文学に志す所あらんとせば、まづ一葉女子の著述を誦じて、然る後人を訪うてその意見を叩くべきなり」。

蒲団屋と沈む濁り江十三夜